本

読書人の雑誌

講談社

1992
November
11

昭和五十二年四月二日第三種郵便物認可　平成四年十一月一日（毎月一回発行）第十七巻第十一号（通巻一九六号）

わがピーター

下店栄一

拙宅にはピーターという虎猫がいる。

我々が飼いだしてもう十数年になるのだから、まあ大変なお年寄りである。

このピーターがえらくばかでかい猫で、普通の猫のサイズの三倍は十分あろうというものだ。手足がその体軀にたいして極めて短いものだから、立ち上がって歩き始めると、お腹の垂れている部分が地面を引きずりそうになる。そんなにも肥っているのだ。

もともとがでっかい猫だったのだが、歳を取るにつれて、腹筋が弱るのであろう、人間様の老人のお腹のように膨れ上がっている。この腹部にも脂肪分がたくさん溜まるということもまたあるであろう、とにかくえらく肥っていて、来客などは、何時もピーターを初めて見ると、

「まあなんて肥った猫なんでしょう。まるで犬か狸みたいだわ」

といって、哀れなピーターを露骨に指差しては、笑うのである。

誰も好き好んで、こんなに肥ったわけではあるまい。

これは多分に先天的なこともあるのではないだろうか。このピーターのお母さんというのが、やっぱり、このピーターが生まれたときに、今のピーターのようにでかかったことを思いだす。感心するのは未だいいとして、軽蔑するというのは鼻持ちならない。

ピーターだって、肥ろう肥ろうと努力して肥っているわけではないのである。おそらく、まあドイツ語で言うと、"in dürftiger Zeit"に生まれ育ったから、食い物に不自由したのではないか。

拙宅に来てからも、いまは亡きハイディーという犬が庭に一緒にいて、ピーターが猫の習性でちょっと食べ、また後にちょっと食べすると、貪婪(どんらん)でもあり犬の本性にも忠実であったハイディーは、ピーターが食べ残している、と言うよりも、また後で食べようと大切に御馳走をとっておくと、それをペロリと平らげてしまうのである。そういうことが何回、いや何十回かあって、さすがにピーターも腹に据えかねたのであろう、だんだんと犬と同じように、餌をもらうと、一気に食べるような習慣がついてしまったのである。まあこれはひとさまも同じことなのだが、食事を毎回一気に碌に噛みもしないで全部食べつづけると、どう言うわけか肥るのである。猫は

しかしもちろん咀嚼することはしないし、缶詰は柔らかくぐしゃぐしゃになっているから噛みようがなく、鵜呑みすることになる。

事ほど左様に、我家のピーターもどんどん肥り続けて、今日のような偉丈夫になってしまったのであった。これは笑い事ではなくて、哀しい、切ない人生の現実が弁証法的にそこに止揚されて現象しているのである。

さらに彼の場合は、初めは一日分として缶詰半分の餌をやっていたのが、何時もお腹が空いているような顔をして、ニャーニャーなくものだから、こっちの方も、識らず識らずに沢山やるようになり、今では彼は一日に一缶半も食べないと満足しないようになってしまったのである。

かくしてこのふとっちょピーターが出来上がったのだ。

さてこのピーターだが、このごろ耳が遠くなってきたのである。

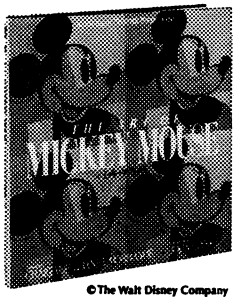
何万年か人間に飼い慣らされてきた猫という家畜ではあるものの、嗅覚と聴覚は、我々ひとさまとはおお違いで、野生動物の頃と変わらずずうっと鋭い。鋭いしそれは当然のことながら、さらに嗅覚による経験の地平で、直接目が届かないもの影や、自分の後ろなどというのは、この鋭敏な嗅覚と聴覚に頼って、生活のミリューを構成しているこの猫ピーターにとっては、その一つである。聴覚が駄目になるというのは大変なことに違いないのだ。遠くでよんでも、近くで「ピーター」と叫んでも、なにか音がしているかな、ということは分かるらしい、頭をもたげて、これもおかしくも哀しいことには声のする全く反対の方角を見てしまうのである。足音など近づいても、すぐ側にくるまで聞こえないのであろう、ぽかんとしていて、すぐま近になると、ぶったまげてとびあがり、方向もなにもあらばこそ一目散に逃げ去ろうとする。

このごろは自分の声でさえも余りよく聞こえないにちがいない、鳴き方まで変わってきて、昔は可愛い声をしていたのに、このごろは、車に轢き潰されたときに出すようなおおきな叫び声で、

「ぎゃあぎゃあ」

と鳴きわめくのである。それは本当におどろおどろしい。これが昼間ならまだしも、皆が寝静まった丑三つどき頃ともなれば、どんなに離れている隣家だって、その叫び声が聞こえるに違いない。そう思うと、「そとは寒いんだから入れて頂戴よ」といって、寝室の

近刊予告
ミッキーマウス画集
THE ART OF MICKEY MOUSE
アートを愛する人に！
ミッキーファンに！



©The Walt Disney Company

[序文]
ジョン・アップダイク
[編集]
クレイグ・ヨー
ジャネット・モラ・ヨー
[訳者]
竹内和世ほか

＊

アンディ・ウォーホルはじめ、世界中のアーティスト、デザイナー、イラストレーター、漫画家たちがつくり出した、世界一有名なねずみ「ミッキー・マウス」のポートレート。
●定価4,500円(税込)

講談社

外からなど、
「みゃあ、みゃあ」
と大声でやられると、女房のラヴォンヌも僕も一遍に目が覚めて、彼を家の中にいれてやらざるを得ない。
しかもこのごろでは、立っているのや、あたまをもたげているのが大儀なのだろうか、ごろごろ寝転がってばかりいる。
世の様々な出来事はもう一切関心がないといわんばかりに、馬耳東風を決め込んでいるのである。
今までは好んで、屋外にいたのが、このごろはもっぱら家の中が気に入ってしまったようなのだ。というのも、多分そとでは、パロスヴェルデスの岡に棲むスカンクやラクーン、隣家の犬がどういうわけか拙宅の庭先にしょっちゅう夜中にやってくるから、それにやたらと脅かされて、外泊はもうこりごりなのかも知れない。
家の中には、ちゃんとサンドボックスがあるのであるが、それはもう一匹のターシャと言うペルシャ猫の雌が元々家猫として育ったので、それ専用と思っているのか、便意を催すと、すごいだみ声で、また我々にドアを開けてくれと促すのである。ドアを開けてやると、すぐ用を足しに走っていくかと言うと、そうでもない。一度外に出ると、しっかり四つ足を踏ん張って、四辺を睥睨する。しばらくそうしていて、やおらゆっくりととある方向に歩きだすのが普通である。
こう言うところは、歳を取って身のこなしが素早く出来なくなっているようにもみえるのだが、必ずしもそうではない。驚き戦いて、脱兎のごとく走るときは、結構すさまじい早さで突っ走る。老いぼれた心臓に悪いのではないかと案じるほどなのである。
だから四辺を睥睨（へいげい）するのは、実は失われた聴覚を何とか視覚で補おうとしてあたりを一生懸命見ようとしているのではあるまいか。
もともと屋外が自分も好きであり、われわれも蚤の大軍が雲霞のごとく培養されるのはごめんこうむりたいというので、もっぱら外で暮らしていたピーターが、このごろは妙に人懐こくなり、我々が食事をしていると、じぶんの身体をすり寄せてきて喉をごろごろならす。そして食べものをいじらしく乞い求めるのだ。
その姿態はあたかも、
「もう生命はそんなに長くないのだから、すこしでもあなたに甘えたい」
といっている風なのである。こう言うのには、ぼくは極めて弱い。
それに、自分が既に還暦になんなんとしているのだから、やはり、もう人生の先がお互いに見えてきている。袖振り合うも多生の縁と、来世でも又このピーターに巡り逢うのではないか、という気がしきりにしたりするのだ。
そこで、夕食ごとにピーターに魚や肉の小さく千切った切れ端をくれてやり、ラヴォンヌと三人で一緒に食事をするのが日課になっている今日このごろなのである。勿論ピーターにとっては、それが二度目の夕食であることは言うまでもない。
ところで、ぼくがピーターのことをこうして書いているということを彼はつゆ識らず、いまピーターはぼくのすぐ側に座って、洗顔の最中である。

於羅府

（しもみせ・えいいち　カリフォルニア州立大学教授・哲学）